

# 人生“さけ”にはじまり“さけ”におわる

就職部就職課課長補佐 中島 茂

故小野村資文館長との出会いは昭和44年3月私が本学図書館に奉職したばかりの春。なかなか個性的で気骨のある人との印象であった。

それ以来17年、館長の愛したものは、酒と髭と稀観書のイメージが強い。

特に酒の収集は、趣味の域を脱し、本格的に取り組んでおられたようだが、それにしてもこれだけ素晴らしい種類をものにしては、現物を見るまで想像もつかなかった。1本1本の収集に、ありし日の小野村館長の顔がオーバーラップして、話しかけてくるような気がしてならない。

館長の収集方針は、同じ品を2本入手しその1本を味わい、他の1本を保存する方法である。

本人の収集意図が明確に表現されている。特に、全体の3分の2を占めるウイスキーには情熱を傾けていただけに感銘する品が多い。聞けば若い頃から酒に興味を持ちはじめ、30代に入ってから本格的に集めだしたようである。

ウイスキーひとつとっても、世界にはいろんなタイプのものがある。スコッチ（モルト・ブレン・ブレンデッド）アイリッシュ、アメリカン、バーボン、テネシー、コーン、カナディアン、etc………… それぞれの風土が生んだ、歴史が生んだ、約500ボトル。

収集の多くは、私どもが見慣れたものだが、自分の舌と、喉でとらえたものだけに何かしら哀愴がある。

故人と酒の席で話したことだが、“収集の1本1本に楽しさもあり、悲しさもあり、思い出深いものばかりだ……” 遊びの世界の表裏をいつも感じさせてくれるものだと。

“まだまだがんばらねば”と言っていた館長。今後もずっと収集の軌跡を引いて欲しかったのに、かえすがえすも惜しい人を失ったものである。

背広の上着ポケットに片手をつっこんだありし日の姿を思い浮かべると、思わず呼びたくなる。

亡くなられてから1ヶ月、早いものである。それにしても1人の人間の生きざまをこのような形で残すことができるとは、特定の品を数多く収集することはだれにでもそう簡単にできることではない。

なき館長の素晴らしいコレクションを見るたびに公子夫人の深い愛情に頭の下る思いである。合掌。